

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P6043 参照



※ P6055 参照



※ P6050 参照

2024.11
No. 777

目次

[大学の動き]

- 理事が発令される 6038
- 副学長が発令される 6039
- 副理事が発令される 6040
- 理事補が発令される 6040
- 経営協議会委員（学外委員）が発令される 6041
- 部局長の交替等 6042
- 令和6年度大学院秋季学位授与式を挙行政 6043
- 令和6年度大学院秋季入学式を挙行政 6048
- 「京都大学オープンキャンパス2024」を開催 6050
- 「京都大学 ELCAS2024」を開催 6052

[部局の動き]

- 東南アジア地域研究研究所図書室本館が登録有形文化財に登録 6053
- ザンビア共和国のルサカで SATREPS「SPLASH プロジェクト」キックオフシンポジウムを開催 6053

- 第17回次世代グローバルワークショップを開催 6055
- ベトナム国家大学ハノイ校への短期派遣プログラムを実施 6055
- 第1回多文化共修セミナー2024を開催 6056

[寸言]

- Do Soon Now!（どう・すん・の!） 家次 恒 6058

[随想]

- 京大の地域研究 名誉教授 水野 広祐 6059

[洛書]

- 講座制+多様性>PI制? 山根 久代 6061

[訃報]

- 矢島 脩三 名誉教授 6062
- 小野寺 秀俊 名誉教授 6063
- 富田 眞治 名誉教授 6064
- 市村 眞一 名誉教授 6065



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学の
動き

理事が発令される

10月1日付けで理事が任命されました。任期は令和8年9月30日まで。



男女共同参画、
渉外（基金・同窓会）担当
稲垣 恭子（再任）



企画・調整、評価、
附属病院担当
岩井 一宏（再任）



財務、施設、環境担当
江上 雅彦（再任）



研究推進担当
北川 進（再任）



教育、学生、入試担当
國府 寛司（再任）



研究倫理、研究公正、
研究規範、国際交流担当
樫木 哲夫（再任）



情報基盤、図書館担当
引原 隆士（再任）

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

副学長が発令される

10月1日付けで副学長が任命されました。任期は【 】のとおり。



学術研究支援担当
石川 冬木（再任）
【令和8年3月31日まで】



教育推進（人文社会系）担当
宇佐美 文理（再任）
【令和7年3月31日まで】



国際高等教育院担当
大嶋 正裕（再任）
【令和7年3月31日まで】



法務・コンプライアンス担当
笠井 正俊（再任）
【令和8年9月30日まで】



国際戦略担当
河野 泰之（再任）
【令和7年3月31日まで】



学位プログラム担当
杉野目 道紀（再任）
【令和8年9月30日まで】



学生支援担当
高倉 喜信（再任）
【令和8年3月31日まで】



評価、研究拠点担当
時任 宣博（再任）
【令和7年3月31日まで】



学部教育改革担当
宮川 恒（再任）
【令和7年3月31日まで】



安全衛生担当
米田 稔（再任）
【令和7年3月31日まで】

[目次に戻る](#)

大学の
動き

副理事が発令される

11月1日付けで新たに副理事が任命されました。任期は令和7年3月31日まで。



社会連携・イノベーション
推進担当
室田 浩司（新任）

[目次に戻る](#)

理事補が発令される

※副プロボスト

補佐する理事	氏 名	任 期	
男女共同参画担当理事	木 下 彩 栄	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)
男女共同参画担当理事	平 山 朋 子	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)
渉外担当理事	廣 井 良 典	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)
企画・調整担当理事	北 川 宏	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)※
企画・調整担当理事、 附属病院担当理事	藤 田 恭 之	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)※
企画・調整担当理事	山 下 徹 哉	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)※
企画・調整担当理事、 研究推進担当理事	若 宮 淳 志	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)※
企画・調整担当理事、 研究推進担当理事	松 浦 健 二	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)※
財務担当理事	草 野 真 樹	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)
施設担当理事	金 多 隆	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)
研究推進担当理事	アスリ チョルパン	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)
研究推進担当理事	田 中 功	令和6年10月1日～令和7年3月31日	(新任)
教育担当理事	西 岡 加名恵	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)
教育担当理事	八 木 知 己	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)
学生担当理事	佐 藤 健 司	令和6年10月1日～令和8年3月31日	(再任)
学生担当理事	横 井 伯 英	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)
入試担当理事	藤 原 正 幸	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(新任)
研究公正担当理事	蓮 尾 昌 裕	令和6年10月1日～令和8年9月30日	(再任)

大学の
動き

研究規範担当理事	渡 邊 大	令和 6 年 10 月 1 日～令和 8 年 9 月 30 日	(再任)
国際交流担当理事	北 島 薫	令和 6 年 10 月 1 日～令和 8 年 9 月 30 日	(再任)
国際交流担当理事	横 山 美 夏	令和 6 年 10 月 1 日～令和 8 年 9 月 30 日	(再任)
情報基盤担当理事	岡 部 寿 男	令和 6 年 10 月 1 日～令和 8 年 9 月 30 日	(再任)
情報基盤担当理事	白 石 誠 司	令和 6 年 10 月 1 日～令和 8 年 9 月 30 日	(新任)

[目次に戻る ↗](#)

経営協議会委員（学外委員）が発令される

10月1日付けで経営協議会（学外委員）が任命されました。任期は令和8年9月30日まで。



株式会社横河ブリッジHD社外取締役
株式会社ゆうちょ銀行社外取締役
天野 玲子（再任）



公益財団法人高輝度光科学研究センター常務理事
安藤 慶明（再任）



公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター顧問
伊藤 明子（再任）



株式会社島津製作所
代表取締役会長
上田 輝久（再任）



住友ファーマ株式会社
名誉顧問
多田 正世（再任）



京都大学名誉教授、国立研究開発法人理化学研究所名誉研究員
玉尾 皓平（新任）



東京大学名誉教授・特任教授
星薬科大学名誉教授・前学長
中西 友子（再任）



大阪大学名誉教授、
大阪大学前総長
平野 俊夫（再任）



株式会社三菱UFJ銀行
特別顧問
平野 信行（再任）

大学の
動き



株式会社バッファロー
代表取締役社長
牧 寛之（新任）



公益財団法人文字・活字
文化推進機構専務理事
町田 智子（再任）



京都市長
松井 孝治（新任）



DMG森精機株式会社
取締役社長
森 雅彦（再任）



京都府公立大学法人理事
京都府立大学副学長
山口 美知代（新任）

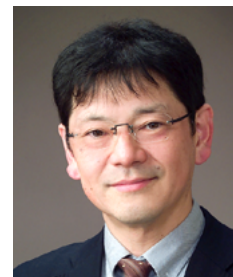
[目次に戻る ↗](#)

部局長の交替等

【新任】

情報環境機構長

岡部寿男 情報学系（学術情報メディアセンター）教授が、引原隆士 情報環境機構長の後任として選出されました。任期は令和6年10月1日から令和8年9月30日まで。



【再任】

医学研究科長・医学部長

伊佐 正 基礎・社会医学系（大学院医学研究科）教授が、医学研究科長・医学部長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和7年9月30日まで。

国際高等教育院長

大嶋正裕 国際高等教育院特定教授が、国際高等教育院長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和7年3月31日まで。

大学
の
動き**大学院教育支援機構長**

平島崇男 大学院教育支援機構特定教授が、大学院教育支援機構長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和7年3月31日まで。

学生総合支援機構長

高倉喜信 白眉センター特定職員が、学生総合支援機構長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和8年3月31日まで。

環境安全保健機構長

米田 稔 環境安全保健機構特定職員が、環境安全保健機構長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和7年3月31日まで。

図書館機構長

永盛克也 文学系（大学院文学研究科）教授が、図書館機構長・附属図書館長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和8年9月30日まで。

成長戦略本部長

室田浩司 成長戦略本部特定職員が、成長戦略本部長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和8年9月30日まで。

国際戦略本部長

河野泰之 国際戦略本部特定教授が、国際戦略本部長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和7年3月31日まで。

人と社会の未来研究院長

内田由紀子 全学教員部（人と社会の未来研究院）教授が、人と社会の未来研究院長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和8年9月30日まで。

大学文書館長

伊藤孝夫 法学系（大学院法学研究科）教授が、大学文書館長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和8年9月30日まで。

高大接続・入試センター長

村上 章 大学院教育支援機構特定教授が、高大接続・入試センター長に再任されました。任期は令和6年10月1日から令和7年3月31日まで。

[目次に戻る ↗](#)

大学
の
動き

令和6年度大学院秋季学位授与式を挙行

9月24日(火)、百周年時計台記念館において、湊 長博 総長、教育・学生・入試担当理事、関係部局長などの出席のもと、令和6年度大学院秋季学位授与式を挙行了しました。湊総長から、代表者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞がありました。

学位授与者数は次のとおりです。

修士

学 位 名	2024年9月24日付け			左記のうち留学生数※			累 計
	男	女	計	男	女	計	
修士(文学)	0	0	0	0	0	0	5,659
修士(教育学)	0	0	0	0	0	0	1,726
修士(法学)	0	0	0	0	0	0	1,594
修士(経済学)	8	4	12	8	4	12	2,215
修士(理学)	10	6	16	6	5	11	12,656
修士(医科学)	0	0	0	0	0	0	489
修士(人間健康科学)	0	1	1	0	0	0	902
修士(薬科学)	3	2	5	3	2	5	806
修士(工学)	1	0	1	1	0	1	36,756
修士(農学)	6	10	16	6	7	13	12,209
修士(人間・環境学)※ ¹	0	0	0	0	0	0	4,220
修士(エネルギー科学)	6	5	11	5	5	10	3,346
修士(地域研究)※ ²	2	6	8	0	0	0	521
修士(情報学)	9	2	11	6	1	7	4,585
修士(生命科学)	5	4	9	5	3	8	1,826
修士(総合学術)※ ²	0	1	1	0	0	0	81
修士(地球環境学)	2	5	7	2	3	5	836
修士(文学)※ ³	3	1	4	3	1	4	38
修士(グローバル経済・地域創造)※ ³	3	5	8	2	4	6	13
修士(社会健康医学)	—	—	—	—	—	—	66
修士(薬学)	—	—	—	—	—	—	2,299
総 計	58	52	110	47	35	82	92,843

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

※¹ 修士(人間・環境学)は、累計に一貫制博士課程の修士修了相当授与者9名を含む

※² 修士(地域研究)および修士(総合学術)は、一貫制博士課程の修士修了相当授与者のみ

※³ 国際連携教育課程

大学の
動き

修士（専門職）

学 位 名	2024年9月24日付け			左記のうち留学生数※			累 計
	男	女	計	男	女	計	
社会健康医学修士（専門職）	0	0	0	0	0	0	633
公共政策修士（専門職）	2	1	3	0	0	0	678
経営学修士（専門職）	0	1	1	0	1	1	1,381
総 計	2	2	4	0	1	1	2,692

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

法務博士（専門職）

学 位 名	2024年9月24日付け			左記のうち留学生数※			累 計
	男	女	計	男	女	計	
法務博士（専門職）	0	0	0	0	0	0	2,914
総 計	0	0	0	0	0	0	2,914

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

博士

■課程博士

学 位 名	学位授与者数（下段は留学生の内数※）									総計	累計
	2024年5月23日付			2024年7月23日付			2024年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（文学）	0	0	0	1	0	1	0	1	1	2	1,255
	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
博士（教育学）	1	0	1	4	1	5	0	1	1	7	309
	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	
博士（法学）	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	441
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
博士（経済学）	1	0	1	0	0	0	2	4	6	7	778
	0	0	0	0	0	0	2	4	6	6	
博士（理学）	2	3	5	3	0	3	7	1	8	16	6,150
	0	1	1	0	0	0	5	1	6	7	
博士（医学）	12	3	15	10	2	12	5	4	9	36	10,863
	1	2	3	1	0	1	1	0	1	5	
博士（医科学）	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	163
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（社会健康医学）	0	0	0	1	0	1	0	1	1	2	139
	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	

大学の
動き

学 位 名	学位授与者数（下段は留学生の内数※）									総計	累計
	2024年5月23日付			2024年7月23日付			2024年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（人間健康科学）	0	3	3	0	1	1	2	1	3	7	128
	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,178
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	193
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（工学）	2	0	2	6	1	7	16	3	19	28	6,679
	1	0	1	1	0	1	7	1	8	10	
博士（農学）	1	0	1	3	2	5	5	6	11	17	3,281
	0	0	0	2	2	4	3	6	9	13	
博士（人間・環境学）	0	2	2	0	2	2	5	0	5	9	1,142
	0	0	0	0	1	1	2	0	2	3	
博士（エネルギー科学）	1	0	1	0	1	1	4	0	4	6	488
	1	0	1	0	0	0	3	0	3	4	
博士（地域研究）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	335
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（情報学）	0	1	1	0	1	1	9	4	13	15	898
	0	1	1	0	1	1	7	2	9	11	
博士（総合学術）※1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（生命科学）	3	2	5	1	0	1	0	0	0	6	533
	1	2	3	1	0	1	0	0	0	4	
博士（総合学術）※2	0	1	1	0	0	0	2	1	3	4	42
	0	1	1	0	0	0	0	1	1	2	
博士（地球環境学）	1	0	1	1	0	1	4	2	6	8	268
	1	0	1	0	0	0	4	2	6	7	
博士（経営科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士(ゲノム医学)国際連携	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
総 計	25	15	40	30	11	41	63	29	92	173	35,301
	5	8	13	7	4	11	35	18	53	77	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

旧制 9,651 含む

※ 1：情報学研究科修了 ※ 2：総合生存学館修了

大学の
動き

■論文博士

学 位 名	学位授与者数									総計	累計
	2024年5月23日付			2024年7月23日付			2024年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（文学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	674
博士（教育学）	0	0	0	1	0	1	1	0	1	2	182
博士（法学）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	205
博士（経済学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	409
博士（理学）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1,583
博士（医学）	7	0	7	2	0	2	5	0	5	14	2,334
博士（医科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
博士（社会健康医学）	1	0	1	1	0	1	0	0	0	2	21
博士（人間健康科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	774
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
博士（工学）	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	4,216
博士（農学）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	2,921
博士（人間・環境学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56
博士（エネルギー科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64
博士（地域研究）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
博士（情報学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	97
博士（生命科学）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	31
博士（地球環境学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
総 計	8	1	9	8	0	8	6	0	6	23	13,652

※留学生は無し

■博士課程教育リーディングプログラム（博士課程の内数）

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数※）									総計	累計
	2024年5月23日付			2024年7月23日付			2024年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
京都大学大学院思修館	0	1	1	0	0	0	2	1	3	4	45
	0	1	1	0	0	0	0	1	1	2	
グローバル生存学大学院連携プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51
充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
デザイン学大学院連携プログラム	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	33

大学の
動き

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数※）									総計	累計
	2024年5月23日付			2024年7月23日付			2024年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
総計	0	1	1	0	0	0	2	2	4	5	189
	0	1	1	0	0	0	0	1	1	2	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

■卓越大学院プログラム（博士課程の内数）

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数※）									総計	累計
	2024年5月23日付			2024年7月23日付			2024年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
先端光・電子デバイス 創成学	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	35
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
メディカルイノベーション	1	0	1	0	1	1	0	0	0	2	12
社会を駆動する プラットフォーム学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
総 計	1	0	1	0	1	1	1	0	1	3	52
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数



学位記授与の様子



式典の様子

（教育推進・学生支援部（教務企画課））

[目次に戻る](#)

令和6年度大学院秋季入学式を挙行

10月5日（土）、百周年時計台記念館において、湊 長博 総長、教育・学生・入試担当理事、関係部局長などの出席のもと、令和6年度大学院秋季入学式を挙行了しました。式典では、湊総長による式辞がありました。

入学者数は次のとおりです。

大学の
動き

令和6年秋季 修士課程入学者数

区 分	入 学			左記のうち留学生数 [※]		
	男	女	計	男	女	計
経済学研究科	6	10	16	2	5	7
理学研究科	3	3	6	3	2	5
薬学研究科	0	1	1	0	1	1
農学研究科	5	10	15	5	9	14
エネルギー科学研究科	7	4	11	7	3	10
情報学研究科	16	3	19	11	3	14
生命科学研究科	4	3	7	4	3	7
地球環境学舎	3	1	4	3	1	4
総 計	44	35	79	35	27	62

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

令和6年秋季 修士専門職課程入学者数

区 分	入 学			左記のうち留学生数 [※]		
	男	女	計	男	女	計
経営管理教育部	2	1	3	0	1	1
総 計	2	1	3	0	1	1

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

令和6年秋季 博士課程入学者数（下段は留学生数 内数[※]）

区 分		進 学			編入学			再入学		中計		総計
		男	女	中計	男	女	中計	男	中計	男	女	
後 期 課 程	経済学研究科	4	1	5	3	3	6	0	0	7	4	11
		4	1	5	1	2	3	0	0	5	3	8
	理学研究科	6	4	10	9	3	12	0	0	15	7	22
		5	4	9	9	3	12	0	0	14	7	21
	薬学研究科	1	0	1	3	1	4	0	0	4	1	5
		1	0	1	1	1	2	0	0	2	1	3
	工学研究科	1	0	1	28	12	40	0	0	29	12	41
		1	0	1	20	9	29	0	0	21	9	30
	農学研究科	5	4	9	2	5	7	0	0	7	9	16
		5	4	9	2	5	7	0	0	7	9	16

大学の
動き

区 分		進 学			編入学			再入学		中計		総計
		男	女	中計	男	女	中計	男	中計	男	女	
後 期 課 程	エネルギー科学 研究科	2	2	4	4	3	7	0	0	6	5	11
		1	2	3	0	2	2	0	0	1	4	5
	情報学研究科	3	0	3	10	1	11	0	0	13	1	14
		3	0	3	5	0	5	0	0	8	0	8
	生命科学研究科	2	2	4	1	3	4	0	0	3	5	8
		2	1	3	1	3	4	0	0	3	4	7
	地球環境学舎	0	0	0	6	6	12	0	0	6	6	12
		0	0	0	5	6	11	0	0	5	6	11
一 貫	アジア・アフリカ 地域研究研究科	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総 計		24	13	37	66	37	103	1	1	91	50	141
		22	12	34	44	31	75	0	0	66	43	109

※留学生数是在留資格「留学」のみの数



式辞を述べる湊総長



式典の様子

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

[目次に戻る](#)

「京都大学オープンキャンパス 2024」を開催

吉田キャンパスを会場に、京都大学オープンキャンパス2024を8月8日(木)、9日(金)の2日間にわたり開催しました。今年は5年ぶりの全学部来場型による開催で、猛暑の中、大勢の高校生らが参加しました。

百周年時計台記念館百周年記念ホールで行われたオープニングセレモニーでは、湊 長博 総長による講演があり、参加者は皆、熱心に耳を傾けていました。続いて京都大学応援団により、力強い演舞演奏とユーモアを交えたエールが送られ、会場内は大いに盛り上がりました。その後、「在学生からのメッセージ」では、法学部と工学研究科の在学生が、自らの受験体験や大学生

大学の
動き

活を参加者に語りかけました。

8日には総合人間学部、文学部、医学部医学科、医学部人間健康科学科、薬学部、農学部が、9日には教育学部、法学部、経済学部、理学部、工学部が、それぞれ学部説明会を行いました。学部長らによる歓迎挨拶の後、学部の紹介や模擬授業、体験学習、研究室訪問など、各学部の特徴を生かした企画を催し、参加者からは「京都大学の雰囲気の良さが伝わってきて、とても有意義で良い経験になりました。今まではオンラインでしか参加したことがなかったのですが、やはり実際に来場することで最大限のものを得ることができました」といった感想が寄せられました。

他にも、構内の各所を巡るキャンパスツアーや、百周年時計台記念館百周年記念ホールでの在学生交流コーナー、相談コーナー、資料配布コーナー、教員による講演会、サークル紹介、在学生による公開座談会など、多くの企画を開催しました。同館国際交流ホールにて実施した教員や学生による学部紹介コーナーや、教員著書・ポスター展示なども好評でした。また、附属図書館、総合博物館、百周年時計台記念館歴史展示室も、多くの見学者でにぎわいました。



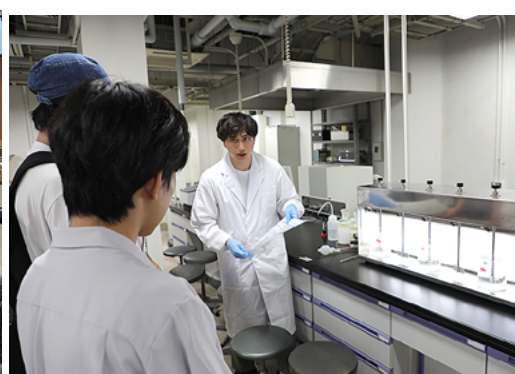
湊総長の講演



応援団の演舞演奏



模擬授業



オープンラボ



在学生交流コーナー



百周年時計台記念館周辺の様子

大学の
動き

昨今、受験生の志望校選びに関し、オープンキャンパスはますます重要なものとなってきました。今回のオープンキャンパスへの参加を通して、本学の雰囲気や魅力を十分に感じていただき、入学への意欲が一層高められたと期待しています。

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

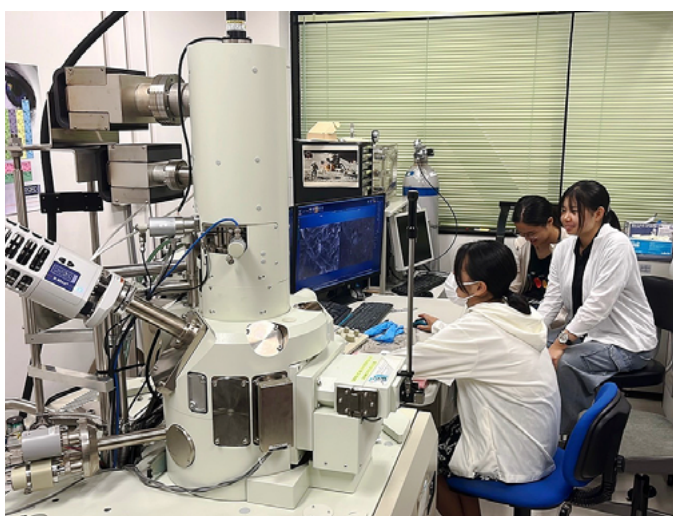
[目次に戻る ↗](#)

「京都大学 ELCAS2024」を開催

高校生のための体験型科学講座「ELCAS (エルキャス)」を7月～8月に開催しました。本事業は、高校1年生・2年生を対象とし、主体的に学問を究めようとする高校生の育成を主な目的としています。本年度は「講義型」と「演習型」の2つのプログラムを企画し、全国から受講生を募集しました。

講義型プログラムは、7月22日(月)と23日(火)にオンラインで開催しました。附置研究所・センターの研究者が講師を務め、最先端の研究紹介を盛り込んだ10テーマの講義を実施しました。

受講した高校生からは「先入観や考えが改められた。『目からうろこ』の授業だった」、「授業が丁寧で分かりやすく1時間半が本当にあつという間に過ぎた」、「受講している方々の積極的な姿勢にも刺激を受けた」などの感想が寄せられました。



演習型プログラム「小惑星リュウグウの砂から紐解く太陽系の進化」

演習型プログラムは、8月19日(月)～21日(水)に構内で講座ごとに分けて開催しました。本年度は文系・理系合わせて14講座を開講し、講師は学部・大学院の教員や博士後期課程に在籍する若手研究者が務めました。

受講した高校生からは「研究者の研究に対するパッションを生で感じることができ、刺激的な体験となった。高校ではできないような実験や講義が楽し

かった」、「内容を教えるだけでなく、議論することに重点を置いていて非常にためになった」、「高校で習っている内容が大学での勉強に直接つながっていることを実感した。まずは高校レベルの学力を定着させ、次は京大生として京都大学で研究したいと強く感じた」などの感想が寄せられました。

本事業では引き続き、京都大学ならではの多種多様な学びの機会を高校生に提供していく予定です。

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)



東南アジア地域研究研究所図書室本館が登録有形文化財に登録

東南アジア地域研究研究所の図書室本館が、2024年8月15日付で国の登録有形文化財に登録されました。この建物は、旧京都織物株式会社^{れんが}の事務所として1889年に建設されました。当時の洋風赤煉瓦建築の外観を損なうことなく、現在も図書館として使用されています。国の文化審議会では、明治初期の工場事務所建築が現存している点が評価され、本学では12番目の登録有形文化財となります。



東南アジア地域研究研究所図書室本館

東南アジア地域研究研究所では、図書室の建物と所蔵する東南アジア資料を保存・活用すべく、2023年9月に「東南アジア図書室保存基金 (CSEAS Library Fund)」を設けました。これからも、「京都モダン建築祭」に参加するなど一般公開の機会を通して、建築と資料という2つの文化遺産を継承しつつ、京都、そして日本における東南アジア研究拠点として活動していきます。

(東南アジア地域研究研究所)

[目次に戻る](#)

ザンビア共和国のルサカで SATREPS「SPLASH プロジェクト」キックオフシンポジウムを開催

地球規模課題対応国際科学技術協力事業 (SATREPS) の研究プロジェクト「下痢リスク可視化によるアフリカ都市周縁地域の参加型水・衛生計画と水・衛生統計」(SPLASH プロジェクト) は、9月24日 (火) に、ザンビア共和国のルサカにおいてキックオフシンポジウムを開催しました。

SPLASH プロジェクトは、特にコレラなどの下痢性疾患が頻繁に発生する都市周縁の未計画居住区に焦点を当て、参加型衛生調査と下痢リスク可視化技術を活用して地域住民の行動変容を促すことを目的としています。また、ザンビアにおける深刻な水・衛生問題に対応するため、日本政府からザンビアでの活動に約3億円 (200万ドル、JICA) の資金提供を、また日本国内での活動に1.7億円 (JST) の支援を受け、2024年から5年間にわたり実施される予定です。

シンポジウムには、ザンビア政府よりブリリアント・ハベエンズ 技術科学省次官およびロマス・カマンガ 水開発衛生省次官、ザンビア大学より副学長代行としてトライウェル・カルソパ 同大学教授、ルサカ市よりヴィクター・カゴリルサカ 市公衆衛生局長、プロジェクトリーダーとして、日本からは本学の原田英典 アフリカ地域研究資料センター准教授、ザンビアからはカワワ・バンダ ザンビア大学統合的水資源管理センター上級講師が出席し、その他北海道大学、東北大学の関係者を含む120名以上が参加しました。

ハベエンズ次官は、「SPLASH プロジェクトは水・衛生 (WASH: Water, Sanitation and Hygiene) 管理における重要課題に最先端技術を導入し、ザンビアと日本の専門家が協力して

部局の
動き

水・衛生関連の健康問題に取り組む能力を育成する」と述べ、このプロジェクトを「ゲームチェンジャー」と評しました。竹内一之 在ザンビア日本国特命全権大使もまた、「水と衛生のインフラ整備は目に見えにくい課題ですが、このプロジェクトを通じて、住民が生活環境の改善の重要性を認識し、実質的な変化を生み出すことができるでしょう」と述べ、舘山丈太郎 JICAザンビア事務所代表は、2023年のコレラ発生が700名以上の命を奪い、21,000名以上に影響を与えたことを踏まえ、「水・衛生の改善を通じて、今後このような悲劇が繰り返されないようにしなければならない」とコメントしました。

今年は、日本とザンビアの外交関係樹立60周年を記念する年でもあり、本プロジェクトにより両国間の協力がさらに深まることが期待されています。



ハベエンズ次官



カマンガ次官



カルソバ教授



原田准教授



バンダ上級講師



竹内大使



舘山代表



集合写真

(学術研究展開センター)

[目次に戻る](#)



第17回次世代グローバルワークショップを開催

学際融合教育研究センターアジア研究教育ユニット(KUASU)は、9月27日(金)～29日(日)に第17回次世代グローバルワークショップを開催しました。今年度は「Transculturality and Sustainability: Navigating New Horizons」をテーマとし、ハイデルベルク大学京都オフィスおよびドイツ科学・イノベーションフォーラム東京(DWIH Tokyo)との共催で開催しました。参加者は、世界中から多くの応募があり、その中からインドネシア、台湾、アメリカ、ドイツ、日本などの国々から18名の若手研究者が選出されました。

3日間にわたり、移動とトランスカルチュラルリティ、社会経済と福祉、持続可能な未来に関する発表が行われました。初日にはモニカ・ジュネジャ ハイデルベルク大学教授、2日目にはテオドル・リチャード 国立中興大学教授によるKeynote Speechが行われ、トランスカルチュラル・スタディーズに関する新たな視点が提供されました。

2日目の夜には、想田和弘 監督によるドキュメンタリー映画「五香宮の猫」の上映会が行われ、参加者とのQ&Aセッションも実施されました。

最終日のラウンドテーブルとプラナリーセッションでは、トランスカルチュラル・スタディーズの方法論に関して活発な議論が交わされ、学際的な知見を深めました。参加者からは「異なる分野の研究者との対話を通じて新たな視点を得た」といった感想が多く寄せられました。

KUASUでは、今後も次世代研究者の国際的な学術交流を促進し、若手研究者が世界で活躍するための基盤を提供していきます。



ラウンドテーブルの様子



参加者の集合写真

(大学院文学研究科)

[目次に戻る](#)

ベトナム国家大学ハノイ校への短期派遣プログラムを実施

国際高等教育院は、学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット(KUASU)と協力し、海外の大学間学生交流協定締結校に本学の学生を約2週間派遣するプログラムを含む、全学共通科目キャリア形成科目群「多文化教養演習：見・聞・知@～」を実施しています。9月8日(日)から22日(日)にかけ、8名の学生がベトナム国家大学(VNU)ハノイ校にてサマープログラムに参加しました。

参加学生は、渡航前に1週間の語学学習と共同発表に向けた準備を行い、ベトナム・ハノイでの滞在に臨みました。前半をVNU外国語大学、後半をVNU人文社会科学大学で過ごし、初級のベトナム語講座に加え、ベトナムの歴史や社会に関する講義を受講しました。また、ユネスコ世界文化遺産に登録されているチャンアンや伝統的建築が残るドウオンラム村など、ハノイ

部局の
動き

近郊での実地研修にも参加しました。

最終日には、本学学生とVNUの学生が4つのグループに分かれ、現地で調査したテーマについて共同発表が行われました。中には「日越の大学生の将来に対する意識調査」など、日本とベトナムの大学生双方にアンケートを実施し、将来観を比較する調査を発表するグループもありました。参加者からは「グループワークを通じて、現地の学生と授業外でも親睦を深めることができた」という感想が寄せられました。

国際高等教育院では、今回のプログラム以外にも夏(8～9月)と春(2～3月)に東アジア、東南アジア、欧州の協定校にて、同科目の短期派遣プログラムを提供しています。当該科目は長期留学への準備や、初めて海外の大学で学ぶ機会として活用することができます。海外留学に関心のある本学学生の積極的な履修を期待しています。



ドゥオンラム村での様子



共同発表の様子



VNU の学生との集合写真

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)

第1回多文化共修セミナー2024を開催

国際高等教育院では、世界の学生たちと本学学生が共に学ぶ機会の充実を図る一環で、多文化共修セミナーを開催しています。今年度第1回は、韓国の延世大学校の学生の来学に合わせ、9月27日(金)に開催しました。

本セミナーは、特別講義と学生共同セミナーから成り、海外の学生と共に講義を受け、意見交換を行い、新しい友人を作りながら多様な視点を得る機会として本学学生向けに提供されています。

冒頭のオープニングセレモニーでは、大嶋正裕 国際高等教育院長が開会の挨拶を行い、延世大学校の学生10名を歓迎するとともに、本学学生との議論と交流を積極的に行ってほしいと期待を述べました。続いて、若松文貴 国際高等教育院特定准教授が「日本の捕鯨：食と保全の文化政治学」というタイトルで、捕鯨を事例に食の多様性と禁忌に関する特別講義を実施しました。

部局の
動き

後半の学生共同セミナーでは、人口の一極集中やエネルギー問題など、日本と韓国に共通する社会的課題を題材に両大学の学生が4つのグループに分かれて討論を行いました。各グループとも時間が経つにつれ、活発に意見が交わされ、議論が深まっていきました。

国際高等教育院では、海外から学生が来学する機会を活用し、今後も多文化共修セミナーを開催する予定です。海外学生との交流に意欲あふれる本学学生の積極的な参加を期待します。



開会の挨拶を行う大嶋院長



学生共同セミナーの様子



集合写真

(国際高等教育院)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

Do Soon Now!
(どう・すん・の!)

家次 恒



私が京都大学へ入学した1969年頃は、学生運動が盛んで、授業が休講になることも多く、その分沢山読書をし、友人と議論をして過ごした。当時は吉田界限全体がそのような雰囲気、議論するために難しい本を読んだものだった。大学紛争で東京大学の入試が中止になり、関東からも多くの学生が集まっていて、下宿所も東京からきた理・工学部の学生と一緒にだった。今思えば、多くの人と交流ができ、じっくり物事を考えることができた時間だったと思う。

大学を卒業してからは、銀行員を経て、現在はシスメックス株式会社にて会長を務めている。入社した当時のシスメックスは兵庫県加古川市で血液検査に使われる医療機器・試薬を製造する小さな会社であり、従業員数は700名に満たなかったが、現在は世界190以上の国と地域で使われる医療機器・試薬メーカーへと成長し、11,000名を超す従業員と共に働いている。健康社会の実現に向け、検査や診断の分野で我々がいかに世の中に対し貢献していけるか考え、日々ワクワクしながら仕事をしている。

Do Soon Now! (どう・すん・の!) これは、私が会社経営において大事にしている考えの一つである。要は、「どうするのか?」と合わせて、タイミングを逸することなく「早くやろうよ!」ということである。今回寄稿をするにあたり、この思いをタイトルに込めた。未来を創造する上で大切なのは挑戦する姿勢であり、停滞は出来る事をできる範囲でしようとし、決まって「考えます、検討します、難しいです」と言って一向に進まない。私は会社では「できない理由を並べるのではなく、出来る理由を考えて欲しい。」と伝えている。これは学生の皆さんにも通ずるのではないと思う。グローバルな視野を持ち、先を読む力、言わば「これからどうなるかをイメージする力」を身につけていくことも大切。未来を創造する為にはバックカasting型で物事に向かうべき。世の中の変化を掴み、未来をイメージすること。次にどうしたら実現できるかを考え、スピーディーに世の中の流れをキャッチしタイミング良く行動に移していく。現状や制限を取っ払って未来を考えてもらいたい。

現在は技術革新が早く、変化が大きな時代であり、新しい技術の誕生は、若者にとって新たな挑戦の機会となる。若い人たちには潜在能力があるので、知的ハングリー精神を育て、存在感を出していただきたい。誰しもがリスクは避けたいものだが、リスクとはアラビア語で「明日への糧」とも言う。「リスクがあるからやらない。」ではなく、「リスクをチャンスと捉えて、どう克服できるかを考える!」という発想が必要だと思っている。ぜひ「明日への糧」を基に未来を切り開いていただきたい。

(いえずぐ ひさし、シスメックス株式会社 代表取締役会長 グループ CEO
昭和48年 経済学部経済学科卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

京大の地域研究

名誉教授 水野 広祐



京大の地域研究は発展している。その発展ぶりは、薬学部構内の稲盛財団記念館を中心とする建物群（本部構内総合研究2号館4階のアジア・アフリカ地域研究研究科を含む）、あるいは61名の地域研究学系定員内教員、159名の学生、さらに外国人客員教授、学振特別研究員など様々な研究員が東南アジア地域研究研究所だけで136名に上ることをみても明らかであろう（2024年時点）。1963年に学内措置として東南アジア研究センターができたときは、わずか教員4名、事務員2名であった。

第二次世界大戦後コーネル大学などから始まった地域研究は今日、国際的にはかならずしも発展しているとは言えない。アメリカでは政治学、人類学などの理論化が進み、地域研究は単に情報を提供する奴隷に成り下がったとする意見もある。

世界の大変多くの大学に存在する「東南アジア研究センター」は、多くのスタッフが学部教員の兼任で、いくつかの部屋を使っているに過ぎない。京大の地域研究はこのような世界の状況とは全く異なる。

京大の地域研究の発展には、まず、東南アジア研究センターが学内措置として発足した際、人文科学研究所、文学部、法学部、経済学部の文系部局のみならず医学部、薬学部、農学部などからも委員が出され、当初から文理双方からの教員が在籍したことが大きい。そして、ユタヤ研究をはじめ1970－80年代のタイ研究では、歴史学者、人類学者、生態学者のコラボが研究成果として結実し文理融合研究を開花させたのであった。

今日、世界のアジアアフリカの地域研究センター（構成員の専門は言語学、文化人類学、政治学、社会学だけがほとんど）で、スタッフの専門も含めて名実ともに文理融合研究を実現している組織は京大だけである。

「社会の特質の30パーセントは生態で説明できる」とは私が東南アジア研究センターに入所した時に先輩教員から聞いた言葉である。文化生態学、政治生態学、歴史生態学という議論も飛び出した。生態を踏まえるのは当然となったのであった。

文理融合研究は学際研究に、さらに超学際研究・トランスディシプリナリー研究へと発展する。実践型地域研究という言葉もあった。地域に存在する環境、ジェンダー、土地取りあげ、災害など様々な問題を、地域の人々、農民、労働者、政府、NGOさらに研究者と一緒に解決策を考え、実践を通して理論の展開をはかり、地域認識を刷新する。

地域研究者は、地域やその人々に限らない愛着をもって問題に当たる一方、歴史や社会・生態研究を踏まえ、例えば「インドネシアとは何か」という問いかけを常に行う。この結果、地域社会のホットな 이슈の議論に参加する（＝公論形成に寄与する）、問題解決に貢献すると同時に例えば世界の「インドネシア学」にも革新をもたらす。

日本社会には、躍動するインドネシア経済社会の姿を伝える。巷に反中国の空気にあふれる日本やG7の国々と、「敵はシオニズム」が第一のグローバルサウスは、社会の雰囲気があるで違ふことを伝える。

これらの結果、京大の地域研究は発展してきた。例えば、インドネシアにおいて京大で勉強・

随 想

研究したい人は大変多い。実際に京大に来た方々はそれらの方々のほんの一部でしかない。かつて東南アジア研究センターは、インフォーマルではあったが「京大ジャカルタキャンパス構想」を井村総長、松本総長に提案し、実際にインドネシア政府に打診したことがあった。

地域に根ざし、人々の心を思い、世界水準で先の先をゆく。京大地域研究はさらに発展する。

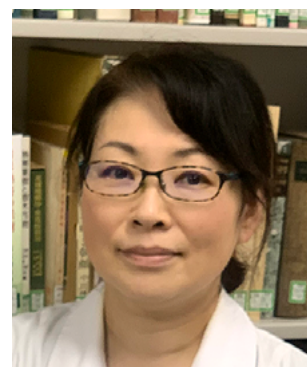
(みずの こうすけ、平成31年退職、元東南アジア地域研究研究所教授、
現在インドネシア大学大学院環境学研究科招聘教授、
総合地球環境学研究所客員教授、全北大学校東南アジア研究所グローバルフェロー、
東南アジア地域研究研究所連携教授、専門は地域研究(インドネシア))

[目次に戻る ↗](#)

洛書

講座制＋多様性＞PI制？

山根 久代



私の研究分野（農学・果樹園芸学）では、私が京都大学農学部に入學した当時は、全国のほとんどの研究室が講座制（PIである教授の下で複数教員構成）で運営されていた。その後、講座制から海外で一般的なPI制（単独教員の下でポスドクや大学院生構成）への移行が進んでいる。研究者の共通目標は新規性・独自性・創造性に富んだ研究成果を世界で最初に発見・開発することである。早くから自立した研究環境を実現できるPI制は、短期に卓越研究者を生み出せる優れたシステムのようにみえる。チームワークを基本とする講座制には、競争原理を持ち込みにくい面もあるかもしれない。しかしながら、帰属意識に基づく団結力、分担制は農耕民族の流れをくむ日本人が持ち合わせる長所的性質とも考えられ、その強みを生かせる講座制は決して研究力を落とすマイナス面だけではないと思っている。

私が研究対象とする果樹は木本性植物であり、維持管理に広大な土地が必要で、研究成果を挙げるにはまず材料整備に労力・時間を要する。そのため、講座制体制下のほうが研究を進展させやすい面がある。講座制のなかで、いかにして卓越研究者を生み出すか、その鍵となるのは「多様性」だと考える。研究室内にできるだけヘテロな環境をつくりだすことで、異なる価値観を共有できれば、講座制の元でも突出した卓越研究者を生み出せると考えている。実際、出身研究室は講座制の元でも非常に有能な卓越研究者を輩出してきた。講座制のなかに多様性を維持できれば、PI制の環境を実現できるうえにプラスアルファがある。卓越研究者の高い志は伝染するので、周りの研究者はポテンシャル以上の力を発揮でき、研究目標も大きく大胆になる。さらに多様性をもつ研究室は、つねに多様な研究シーズに囲まれているため、卓越研究者をはじめ研究室の各メンバーの視野も広がり、研究の停滞阻止につながる。研究室に所属する各メンバーが皆分野のトップランナーを目指し、緊張感・自主性をもって互いに切磋琢磨しつつも、研究室で共有できる（押しつけではない）大きな目標を掲げ、多様な価値観を認め合う研究室運営をできれば、研究室の教員全体の研究力を底上げしながら国際競争にも勝てる人材を育成できるのではないかと考えている。

私は、果樹が秋冬期に休眠し、越冬後の春までは開花が抑制され、春に一斉開花するしくみに関する研究を20年続けており、その分野では国際的にも評価されてきた。しかしながら、まだまだ樹木の休眠や開花メカニズムの全容解明への道のりは遠い。永年性作物であり結実まで時間を要するが、いざ結実すれば毎年たわわに結実する果樹独特の特性を肌で感じ続けた結果、研究の“持続性・継続性”を重視するようになった。自主性・卓越性・多様性・国際性をモットーに、果樹園芸学研究室（2026年に創立100周年を迎える）の次の100年を支える人材養成に力を尽くしていきたい。

（やまね ひさよ、大学院農学研究科准教授、専門は果樹園芸学）

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、矢島脩三 名誉教授、小野寺秀俊 名誉教授、富田眞治 名誉教授、市村眞一 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績などを紹介します。

矢島 脩三 名誉教授

矢島脩三先生は、令和6年9月13日逝去されました。享年90。

先生は、昭和31年3月京都大学工学部電気工学科を卒業、昭和33年同大学院工学研究科修士課程を修了、昭和36年同大学院工学研究科博士課程で単位取得し、昭和39年同大学工学博士の学位を授与されました。昭和36年4月同大学工学部電子工学科助手に採用され、講師、助教授を経て、昭和45年同大学工学部情報工学教室創設と同時に同学科へ所属、昭和46年4月に新設の同大学工学部論理回路講座の教授に就任されました。平成9年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられました。この間、同大学において、平成5年4月から平成9年3月まで情報処理教育センター長を務められ、大学の管理運営に貢献されました。同大学退官後は、平成9年4月から平成16年3月まで関西大学総合情報学部教授に就任され、この間、平成11年10月から平成13年9月まで総合情報学研究科長を務められました。



先生は、博士課程在学中に日立製作所に長期派遣され、当時の先駆的な国産電子計算機であった京都大学デジタル型万能電子計算機第1号(KDC-I)の論理設計を担当し、同機の成功に多大な貢献をされました。同機は、日本の大学における最初のトランジスタ式計算機として昭和35年に同大学に納入され、昭和36年1月には国内大学初の計算センターである「電子計算機室」が発足し、約15年間にわたり共同利用されました。この情報処理教育の全学サービスの重要性は高く認識され、その後、情報処理教育センター、総合情報メディアセンター、学術情報メディアセンターと発展的に継承されています。

先生は、論理回路設計に関する理論研究においても、論理回路理論、オートマトン理論、論理設計自動化および計算量理論などの分野で多くの成果を出されており、先生の指導の下でこれらの研究に取り組んだ学生は、理論と実用の両面に及ぶ様々な分野で活躍しています。大学教員となった者も多く、十余名に及ぶ大学教授を輩出されており、日本の情報工学および計算機科学分野における後進の育成にも多大な貢献をされました。

また、情報処理学会および電子情報通信学会などで、理事、委員長等の要職を歴任されました。電子情報通信学会フェロー、IEEE Life Fellowの称号を授与され、情報処理学会ではコンピュータパイオニアとしても記録されています。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成25年11月瑞宝中綬章を受章されました。このように先生は、論理回路設計の専門分野において、斯学の進歩に大きく貢献されました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)

訃報

小野寺 秀俊 名誉教授

小野寺秀俊先生は令和6年10月7日に逝去されました。享年68。

先生は、昭和53年3月に京都大学工学部電子工学科を卒業、昭和55年3月に同大学院工学研究科修士課程を修了、昭和58年3月に同大学博士後期課程を研究指導認定退学され、昭和59年1月に同大学工学博士の学位を授与されました。昭和58年4月に同大学工学部助手に採用され、平成4年1月に助教授に昇任、平成8年4月に同大学大学院工学研究科に配置換、平成10年4月に同大学大学院情報学研究科に配置換となりました。その後、平成11年4月に教授に昇任され、通信情報システム専攻集積システム工学講座を担当されました。平成2年4月から平成3年3月の間、米国カリフォルニア大学バークレイ校に客員研究員として滞在されました。令和3年3月に定年退職され、京都大学名誉教授の称号を授与されました。同年4月に、大阪学院大学情報学部教授に就任されました。



先生は、集積回路の設計技術分野で日本を代表する研究者で、特に集積回路の物理設計技術、ライブラリ設計技術、低消費電力化設計技術、ばらつき考慮設計技術などの研究において多数の先駆的な研究成果を挙げられました。研究成果は、学術雑誌論文として160余編、国際会議論文として260余編、著書・訳書2冊により発表されました。集積回路の物理設計技術に関する先駆的研究に対し、平成19年に電子情報通信学会よりフェロー称号が授与されました。ばらつき考慮設計技術に関する論文に対し、平成21年と平成30年には電子情報通信学会論文賞を受賞されています。また、同年にはIEEEよりフェロー称号が授与されました。これらの研究を通じて、多くの学生の指導にあたり学術および産業界を牽引する優れた人材を輩出しました。これまでに主査を務めた博士学位取得者は21名にのぼります。

国外での活動としては、IEEE Council on EDAのVice President、International Conference on CADのProgram ChairおよびGeneral ChairならびにAsia South-Pacific Design Automation ConferenceのProgram Chair、General ChairおよびSteering Committee Chairなどを歴任され、集積回路設計技術の進展に貢献されました。国内での活動としては、電子情報通信学会の基礎境界ソサイエティ副会長、VLSI設計技術研究専門委員会委員長、情報処理学会のシステムLSI設計技術研究会主査およびIEEEの関西支部長などを歴任され、学会活動を通じた研究分野の振興と研究者の育成に貢献されました。また、電子情報通信学会のTransactions on Electronicsおよび情報処理学会Transactions on System LSI Design MethodologyのEditor-in-Chiefを務め、電子情報工学分野の研究促進に貢献されました。平成23年より、日本学術会議の連携会員を務められました。

これらの顕著な業績と活動からわかるように、先生は集積回路の設計技術分野において、斯学の進歩発展と優れた人材輩出に大きく貢献されました。

(大学院情報学研究科)

[目次に戻る](#)

訃報

富田 眞治 名誉教授

富田眞治先生は令和6年9月21日に逝去されました。享年78。

先生は、昭和43年3月に京都大学工学部電子工学科を卒業、昭和45年3月に同大学院工学研究科修士課程電気工学専攻を修了、昭和48年3月に同大学博士後期課程を単位修得のうえ退学、昭和49年5月に同大学工学博士の学位を授与されました。昭和48年4月に同大学工学部助手に採用され、昭和53年11月に助教授に昇任、昭和61年10月に九州大学大学院総合理工学研究科教授に就任されました。平成3年4月に京都大学工学部教授に就任、情報工学科の計算機工学講座を担当されました。平成7年4月に同大学大学院工学研究科教授に就任、平成10年4月には新設された同大学大学院情報学研究科教授に就任され通信情報システム専攻のコンピュータ工学講座を担当されました。この間同大学において、総合情報メディアセンター長、大学院情報学研究科長などを務められました。平成21年3月に定年退職、京都大学名誉教授の称号を授与されました。同年4月からは京都大学物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)特定拠点教授/事務部門長を務められました。平成29年に京都情報大学院大学応用情報技術研究科教授になられ、平成30年に同大学副学長、令和5年には同学長に就任されました。



先生はコンピュータアーキテクチャ分野の日本を代表する研究者で、機械命令レベル並列処理(VLIW)計算機QA-1、QA-2、超並列計算機および3Dグラフィクス専用並列計算機など先駆的な研究を行い、今日の計算機システムの高速化に大きく貢献されました。QA-1は、情報処理学会「情報処理技術遺産」として認定、表彰されています。先駆的なアイデアを実機を開発して検証するという研究の進め方が高く評価されています。このほか、情報処理学会論文賞を3回受賞されています。また、主な著書として「並列計算機構成論」(昭晃堂)、「計算機システム工学」(昭晃堂)および「並列コンピュータ工学」(昭晃堂)などがあります。

先生は、ハルビン工業大学顧問教授、IFIP(国際情報処理連盟)TC10委員、情報処理学会理事、情報処理学会関西支部支部長、京都高度技術研究所客員研究部長、京都府ITアドバイザリーボード委員、総合科学技術会議専門調査会および京都府情報政策有識者会議委員長などを歴任されました。電子情報通信学会フェローおよび情報処理学会フェローの称号を授与され、情報処理学会功績賞を受賞されています。これらの顕著な業績からわかるように先生は、計算機アーキテクチャの専門分野において、斯学の進歩発展に大きく貢献されました。

(大学院情報学研究科)

[目次に戻る](#)

訃報

市村 眞一 名誉教授

市村眞一先生は、令和6年7月3日逝去されました。享年99。

先生は、昭和19年9月大阪外事専門学校インドネシア語科を卒業、昭和24年3月京都大学経済学部を卒業され、同年4月同大学院経済学研究科に入学されました。同年7月には和歌山大学助手兼和歌山経済専門学校助教授に着任し、昭和26年8月に同大学経済学部講師、昭和28年12月同大学経済学部助教授に昇任されました。その間、昭和25年6月にガリオア奨学金を得て、米国コロンビア大学大学院経済学部に入學した後、昭和26年9月マサチューセッツ工科大学大学院経済学科へ転学し、昭和28年6月同大学博士課程を修了して学術博士の学位を受けられました。昭和31年4月大阪大学経済学部助教授に転任され、昭和38年7月同大学経済学部教授に昇任、昭和41年4月からは同大学社会経済研究所教授となりました。この間、昭和34年3月から翌4月まで国連ESCAP技術専門家（バンコク）、昭和34年5月から昭和35年3月に米国ジョーンズ・ホプキンス大学大学院経済学部客員講師、昭和40年8月から41年6月にカルフォルニア大学（バークレー校）大学院経済学部客員教授、昭和41年9月から42年6月にペンシルバニア大学大学院経済学部客員教授を務められています。また昭和37年2月には経済学博士号（旧制）を受けました。昭和43年11月京都大学東南アジア研究センター（現、東南アジア地域研究研究所）教授に着任、昭和44年4月には同研究センター所長に就任され54年3月まで10年間務められました。その後、昭和55年6月から12月まで西独ボン大学客員教授、昭和60年2月から3月まで米国ハワイ、イースト・ウェスト・センター研究員、昭和60年6月から10月までシンガポール大学経済統計学部客員教授、昭和61年9月から12月まで米国コロンビア大学大学院経営学部客員教授も務められました。昭和63年3月京都大学を停年退職後は、昭和63年4月から大阪国際大学副学長を平成7年6月まで務められ、平成7年7月から平成14年3月まで、国際東アジア研究センター所長を務められました。



先生は、マサチューセッツ工科大学ではポール・サミュエルソン教授の指導のもと“An inquiry into non-linear macro-dynamic theories of economic fluctuations”の論文で博士号を取得し、初期の研究では、消費者余剰や経済変動の非線形理論を含む数理経済学で数多くの論文を発表してこられました。大阪大学時代には研究の軸足を徐々に日本経済の実証研究に移し、日本のI-O表を作成する政府プロジェクトに参加して『日本経済の構造』（1957年）を出版、また1960年代にはローレンス・R・クライン教授の協力を得て国民経済の大規模なマクロ計量モデルを構築する一大プロジェクトを実施し、その推定に力を注がれました（『日本のマクロ計量モデリング』、市村・クライン、2010年）。東南アジア研究センター所長を務められた昭和44年からの10年間は、ご自身の研究分野を日本からアジア諸国に切り替え、また「経済学者としての標準的な軌跡」を断ち切る覚悟のもとで、複数の学問分野からなる地域研究の研究組織を管理・運営とセンターのあらゆる面における研究基盤の構築に尽力してこられました。そこで社会科学に軸足をおくとともに、幅広い観点から、複合領域たる東南アジア地域研究とその研究基盤の構築をリードされてきました。

先生は、98歳で最後の著書を出版されるまで、理論経済学、実証経済学、アジア経済論、アジア地域研究を中心に著作・論文合わせて日・英文で約300に及ぶ業績を出版されま

訃報

した。初期の非線形理論を含む数理経済学分野での業績によって昭和38年にEconometric Societyのフェローに選出されています。先生が東南アジア研究センターでなされた成果は日本の東南アジア研究の源流の一つを形作ったことにとどまらず、日本を拠点とするアジア諸国や米国とのアジア研究の相互交流の活性化に大きく寄与しています。昭和62年には日本と東アジアの経済学者を中核とするEast Asian Economic Association (EAEA) を創設し長く会長として指導してられました。所長として活性化に尽力された国際東アジア研究センターとあわせて、こうした学術基盤が今日の日本・アジアにおけるアジア経済研究の豊富な人材輩出につながっています。これら一連の教育研究活動、学界への貢献により平成14年、瑞宝中綬章を授与されました。

(東南アジア地域研究研究所)

[目次に戻る ↗](#)